

# バトラー博士が訴えたかったこと

## 大迫政子

Masako Osako

ILCグローバル・アライアンス事務局長

バトラー博士は、1975年に“Why Survive? Being Old in America”（邦題『老後はなぜ悲劇なのか？ アメリカの老人たちの生活』）を出版した。本著はピューリッツァー賞を受賞し、米国における高齢期に対する考え方や公共政策を大きく変えた。その後バトラー博士は30余年にわたり、医師、学者、政策担当者、教育者としてエイジング分野で精力的な活動を続け、亡くなるわずか2年前の2008年、81歳の時に、“The Longevity Revolution”<sup>\*1</sup>を出版した。

30余年の時代を経て著された2冊の著書レビューを通じて、バトラー博士が私たちに訴え続けてきたことを再確認してみたい。また1978年の初来日以来バトラー博士はたびたび日本を訪問し、日本の政策について論評してきているが、本文の最後では特に日本人に向けて博士がどのような存在であったかを考察してみた。

### ■“Why Survive?”でバトラー博士が訴えたかったこと

“Why Survive?”は、今ではよく知られているバトラー博士の個人的な覚え書きで始まる。彼が1歳になる前に両親が離婚し、彼は養鶏場を営む母方の祖父母のもとで暮らすことになった。大恐慌の時期に祖父母と生活をともにして、高齢者の強さや忍耐力そして挑戦心を彼らから学んだ。

こうした個人的な背景を持つバトラー博士は、“Why Survive?”のはしがきで、「アメリカにおける老後の生活は、悲劇に見舞われることが多い」と、私たちに語りかけている。

「この問題について考えようとする人はあまりいない。な

ぜならば、自分自身の死ぬ運命を直視したくないからだ。この問題に取り組むには、社会のエネルギーと資源を必要とするし、また病気になることやだんだんと醜くなっていくことを考えて怖くなるし、さらに若さと生産能力に熱情を注ぐアメリカの文化に対決を挑む結果にもなるからだ」（日本語訳序文—グレッグ・中村文子訳）

バトラー博士は、保健医療、年金、居住政策はもちろん、高齢期についての考え方を抜本的に変革するよう提言した。彼の究極のメッセージは、高齢期が悲劇である必要はないということ、米国人が豊かな高齢期を迎える社会を創ることは可能である、ということだった。

これがいかに革新的な思想であったことか。

今日ではこのようなメッセージはさほど新鮮に聞こえないだろうが、バトラー博士以前にはこのようなことを述べる人は誰一人としていなかったのだ。

バトラー博士は、その後も数十年間にわたり、政治家、科学者、医療・介護に従事する人たちに対して、米国人が豊かに高齢期を迎えられる社会を創るのはいったい誰の責任であるかを考えるよう、鼓舞し続けた。

そして博士は実際に、医学の新分野である「老年学」を創造した。彼が「老年学の父」と呼ばれる由縁である。

### ■“The Longevity Revolution”で

#### バトラー博士が訴えたかったこと

バトラー博士は、“The Longevity Revolution”においても



引き続き、「Why Survive?」で明らかにした彼の思想を展開している。30年以上を経て出版された本著の主目的は、「長寿化と人口高齢化の原点、課題そして対応策について述べ、高齢期に関する現代の仮説に疑問を呈すること」であった。

エイジングをポジティブなものとして考えるべきであり、また高齢者政策として多くのことが実施される必要があるとする博士の基本的なスタンスは、この30年以上変わらない。

しかし、二つの分野で彼は新たな論を展開している。

前著では高齢者の「権利」の拡大を重視したのに対して、本著では「責任あるエイジング」についての概念を展開させ、次のように述べている。

「私は思慮のある一般市民のために本著を書いた。——私は、啓蒙された市民は積極的に行動すると信じているので、行動計画とそれを支えるための一連の知識を示すことを本著の主眼とした」また自身も高齢者となった博士は、個人の立場で次のように述べている。

「私たちが真に長寿を享受するには、当然ながら、高齢者の自立と活力を支え、ひいては社会貢献を促す良好な健康状態が必要である。そのためには、良き遺伝子、財源、優れた医療以上のもの、つまり個人が自分自身がより良く幸せに生きるために責任を負うことが求められる」(p. 191~192)

彼は禁煙と健康に良い栄養の摂取、そして運動を推奨し自身も率先して実行していた。

バトラー博士が伝えるもう一つのテーマは、「我々は長寿

革命に敗れるだろうか?」という憂慮すべき懸案であった。彼は、環境破壊、疾病(エイズ、新型インフルエンザなど)、核兵器、私たち自身の誤った生活習慣など、様々なことがらを「長寿への脅威」と認識している(p.373)。

「科学産業革命の結果として長寿革命が生じたが、同時に長寿革命はその脅威を受けることになった。例えば、核戦争、化学戦争、細菌戦争やテロの危険性のほか、産業公害、オゾン層破壊や地球温暖化を引き起こす温室効果による環境略奪があげられる」(p.362)

“The Longevity Revolution”に込めたバトラー博士のメッセージは、以下のように要約できよう。

「高齢者の状況を改善するために様々な変革が行われてきた一方で、人類全体を脅かすような新たなそして様々な情勢が出現した。我々人類が獲得したものを注意深く守り、人間として誠実にその規範を保持することは、一人ひとりの責任でもある」

#### ■バトラー博士が日本人に訴えたかったこと

1990年、バトラー博士は、“Planning for Old Age: How Japan is Looking Ahead”（「高齢社会に向けた計画作り—日本はどのように将来に備えているか」）\*2と題する記事をワシントンポスト紙に共同執筆した。

彼は「日本は、高齢化する労働力、高騰する医療費にどう対応するか、限られた財源をどう補填するか等の問題に悩まされ続けている」と述べ「ゴールドプラン」についてコ



【\*1】“The Longevity Revolution”  
長寿革命：寿命の驚異的な伸びに言及している。18世紀以降平均寿命は、最も健康で豊かな人口グループでは、およそ40歳から80余歳へと2倍の伸びを示した。

【\*2】“Planning for Old Age: How Japan is Looking Ahead”  
「高齢社会に向けた計画作り—日本はどのように将来に備えているか?」（共同執筆：大迫政子）ワシントンポスト、1990年6月5日

メントしている。そのうえで、「日米両国ともに、人口の高齢化が着々と進行しており、日本は周到なスピードでその問題に対応しているが、米国はそうではない」と総括し、自国における長期的視点での政策の欠如について厳しく指摘している。

“The Longevity Revolution”には日本に関する言及は少ないが、日本の人口減少について次のように述べている。

「イタリア、ドイツ、日本など人口の減少を懸念する国々は、人口の減少によって、人々は富み、文化を豊かに育て、QOLを高める可能性があることを心強く思うべきである。人口成長ゼロは、むしろ人口規模と人工・自然資源のバランスを保つのに役立つであろう」

バトラー博士は生涯にわたり、日本が直面する人口問題を理解するとともに、日本の高齢化政策立案者の長期的な展望を称賛し続けた。

つい数カ月前の2010年6月、Age Boom Academy（ジャーナリストを対象にした高齢化に関するセミナーで、ILC米国センターで1週間開催）において、バトラー博士は、長期政策の立案が重要である点を強調し、1980年に経済企画庁が刊行した140ページの薄い冊子“Japan in 2010”を振りながら熱く語った。

「1980年という早い時期に2010年以降に向けた計画を作成する中で、日本政府は戦略的な計画に盛り込む中心要素として、国際化と技術革新と共に人口の高齢化を明示した。これは、私たち皆が目指すべき長期的ビジョンの優れ

た一例である」

事実、ILC グローバル・アライアンスが刊行した“Global Aging Report”の中で、彼はあり得る例外として日本を選び次のように解説している。「今日までどの国も人口の高齢化や長寿化の進行がもたらす問題を十分包括的に捉えてはこなかったが、日本は唯一その例外と考えられる」(p.12.)

バトラー博士の死を悲しむ多くの日本の友人は、彼の業績や誠実で魅力的な人柄、あるいは思想家・哲学者でありまた卓越したジャーナリストであった彼の才能を称え、また惜しむであろう。しかし最も悲しむべきことは、日本の課題とその解決に向けた潜在能力の対する最大の理解者を失ったことかもしれない。  
(シカゴ在住)

#### 補記：

私がバトラー博士に初めてお会いしたのは、1978年に東京でのIAG国際老年学会参加のために訪日されたときだった。東京での学会の後、奥様のマーナ・ルイス博士と3人で、新幹線で京都まで行き、京都国際シンポジウムにご一緒した。NIA(国立老化研究所)、マウント・サイナイ医科大学、ILC-USAと移られた後も、アメリカ、日本、その他の国際会議で何回か協力させていただいた。

さらに2006年に、私がILC グローバル・アライアンス事務局の事務局長に就任してからは、事務局がILC-USAの建物の2階にあったため、3階にオフィスを構えていらしたバトラー博士とは、ビルのキッチンでコーヒーを飲みながら、よく議論をしたものだった。